

九條武子夫人

——その短歌を中心として——

二十一 鐵 玄

序

光りつつ去りぬ眞白き孔雀こそかの流星のたぐひなりけれ

たちまちに白き孔雀の消え去りぬ夢よりあでに死よりめでたく

右二首の短歌は與謝野晶子の作で、九條武子夫人の遺歌集へ「白孔雀」の卷頭を飾る序歌五首中のものである。四十二年の短い生涯を人間の苦惱に闘ひ通し、佛陀の救ひの光に導かれて地上から消え去つた久遠の女性九條武子を、人間界に於ける、氣品と清淨の象徴たる白孔雀を以ていみじくも比喩したのは、流石に一代の才媛晶子の豊かなる幻想と直觀の鋭さである。この歌は固より右に記す様に、形式的には歌集の序歌ではあるが、同時に内容から觀れば、故人を痛惜する挽歌でもある。

夢ならず白き孔雀が夜の舞にわが魂さそふコスモスの花（白孔雀）

白孔雀の夜の舞に誘はれた、武子夫人の魂も亦白孔雀となつて、併も再び地上に還ることのない様になつた日

は、昭和三年二月七日である。私は筆を運ぶ順序として、九條武子夫人の略傳を、歌集々金鈴々に寄せられた、その師佐佐木信綱博士の序文から引いておき度いと思ふ。へ明如上人の弟姫として、大谷光瑞氏の令妹として、わが武子夫人は、御影堂の北、四時の花絶えざる百花園のうちに生まれぬ。緋の房の襖のおく深くひととなりて、縫の衣に身をよそはれ、數多の侍女にかしづかれ日毎に遊びつるは、飛雲閣、白書院、黒書院、月花の折々に訪ひつるは、伏見の三夜莊なりき。桃山時代の豪華なる建築、江戸盛期の畫人の筆になれる襖繪は、その目にしみ、心にうるほひて、瀾達なる性とともに、典雅なる質は養はれき。えにしさだまりて外遊の旅に出で、歐洲の國々をゆきめぐりて、世界の文明の潮流をも浴みつ。爾來十年、泰西に研學にいそしまるる背の君を待ちつつ、道のために地方を巡らるる外には、ひとり錦華殿のうちにあした夕べをおくりて、あるは洋琴を友とし、あるは畫筆に親しまる。さはれ、法の道におはしたてられし靜かなる胸にも、猶さびしさのみたされざるものあればにや。その折々の思はあふれて數百首の歌としなりぬ。……とあり、母は圓明院藤子刀自、生誕は明治廿年十月廿日である。

夫人の四十二年の生涯を敘述の便に従つて、三期に分けて考へ度い。即ち幼少から廿二歳に九條良致との婚約が成立するまでを前期とし、廿三歳に結婚し夫妻渡歐、學術研究の夫と別れて歸朝後、空閑を守ること十年、大正九年夫の歸朝を迎へるまでを中期とする。この前期並に中期の住居は、主として京都で、大正十年住居を東京に移した以後の生活を後期とする。勿論この時代區分は、夫人の短歌變遷の過程を辿る上の設定である。大體から云つて前期は題詠時代、中期は、歌集々金鈴々を中心とした時代であり、後期は、宗教的隨筆無憂華（短歌並

に脚本、ク洛北の秋々を含む）及歌集「薫染」の時代である。猶歌集「薫染」と大體時代を等しうすると考へらるるものに、遺歌集「白孔雀」がある。

1

武子夫人の短歌は「特殊の境遇と環境から生れた」もので、この「特殊の境遇は、しばしばすぐれた歌人を作るものである」と云ふことは古來の歌人の實例に徴して明かであるが、夫人も亦その一人だと云ふことが出来るだらう。夫人は幼時を追懷してへむかしむかしの大昔こんな話もあつたのサ、と云つて見たい程、私の幼い時分の生活は世にも人にも離れて居た。遠い世界の繪卷もの其繪が一卷づゝかはつてゆくやうに、私のまはりも變つて行つた。そして始めと終りが遂に似もつかぬものになつてゆく、それが昔と今の私であらう。どんな所でどんな日に生れたか知りよう筈はないが、私の兄も姉も生れた邸のどつかで、自分も矢張り生をうけて來たことだけは間違ひなく信じてゐる。もの心ついた頃、私の住居は父母の許から長い廊下續きで、大きな二枚の杉戸のあつた入り口を覺えてゐる。皆北の御方と呼び馴れて居た一棟の家が子供達雜居して入れられてをる所、小さな丸髻を頭にのつけたお婆さんで、何でも出來るこはい女中が全權を委任されて居つたといふ形で、この女中に叱られた時のこはさは今でも忘れない。

私の得なことには末の子であつた爲、父は厳格な中にも破格に私を可愛がつたものらしく思ふ。……其頃中學校を出た斗りの謹嚴な青年が、子供達の家庭教師として聘せられてゐたが、その人は舊臣の息子であつて特に

選ばれたのだつた。常談ひとつ云ふのでもなし、眞面目一方にお役目大切と、雨の降る日も風の日も己の天職として来てくれた。……其頃もう一人先生が増した。それは一層むづかしいものを教へにくる人だつたと思つて居たが、今思ふと其頃から、私達の心の基礎を作つてくれた宗學の先生、といふよりも氣むづかしさうなお坊さん、本願寺の碩學の一人で三部經の御講義をお念佛諸共に聞かせてくれた」と記してゐる。

かうして夫人は法城の奥深く特殊な教育のもとに、宗教的人間形成の一步を踏み出すと共に、また一方豊かな趣味教養を身につける様に指導され成長して行つた。夫人の思ひ出は更に續く、へ男の子供達は大きくなつたので、別の館にうつされ、一切女中抜き生活に入つてそれ／＼中學に通ふやうになつた。長兄が西洋へ立つたりして、俄かに淋しくなつたと云ふので、私は義姉あねの壽子が住んでをつた百花園といふ建物にうつされた。へ百花園とは昔つけられた名ながら、さすが四季を通じて花が絶えなかつた。ことに春より夏にかけては美しかつた。池の向うの白木蓮が一番早く花をつけてから三月に入ると紅梅が咲く。老木の彼岸櫻も水のほとり迄細い枝をたれて花がさいた。舊のお節句の頃には、緋桃がみどりの炎のやうに燃えるのであつた。杜若から藤、牡丹の散る頃は土橋の畔に、石楠花が藥玉のやうに美事に咲いた。五月の稻荷祭はたのしいもののひとつで、物見も掃除が出来て、緋毛氈の上で簾越しに、町の往來をめづらしがりつゝ祭禮を拜した。

かうして美しい春の頃は、用事の多い父も時々百花園の花を眺めに來てくれた。姉と共に毎日々々父の散歩をどれだけ待つてゐたであらう。

「今日は御天氣がいゝし、屹度御もう様が成らつしやるのよ。お雛さまをもう一日片づけしないで置ませう

ね。」

「今日は成らつしやつたら、この間よりも、もつと上手に歌を作つて御目にかけませうね。」

姉は十八私は十四、世は楽しい事より他に何も知らなかつたが……」

めでたさをうたへ小鳥ら櫻さくうらら春日はをとめの日なり（薫染）

の歌はかうした楽しい少女の日への回想であり、再びかへらぬ少女時代讚美の氣持でもあらう。

前生は知らずされどもかばかりに人にしたしむよき因もちぬ（薫染）

この歌は新たに結ばれた響子姫との姉妹の縁に、満ち足りた幸福を歌つたものでもあらうか。

歌よめとをしへられつる九つの父がみたまへのわれの戀しさ（金鈴）

幼い日になつかしみ、短歌への第一歩を踏出した思ひ出深い年の印象であり回想でもある。

へ姫の歌才は、父君からの御遺傳にもよりませう。光尊師は雅號を『六華』と呼ばれまして、歌道に秀でられ、今なほその詠草は、二萬餘首も遺されてあります。なほ、武子姫の幼き日には、京洛の歌壇が漸く隆盛になつてゐました。それは、長くも、絶世の偉大な歌人とも仰ぎまつるべき、明治大帝の思召より、舊都の京に在る華族方の歌道向上が、計れてゐたからでありました。尊き思召によりまして、京には御歌所の方が、指導のために常に滞留せられ、なほ、夏休みになりますと、御歌所の植松有經氏、大口鯛二氏などの名だたる歌人たちが、毎年京へ來られるのであります。この方々を、主人側としてお迎へになるのは、光尊師でありあした。

西本願寺に、または、伏見桃山にあるお別荘の三夜荘に、御歌所の右の方々が、お泊りになるのです」

三夜莊父がいましし春の日は花もわが身も幸多かりし（金鈴）

幸うすぎわが十年のひとり居に戀しきものを父とし答ふ（〳〵）

父君光尊師の末姫とし、その鐘愛を一身に集めた夫人の少女時代は、かうした恵まれた文學環境の中に育まれ、直接作歌の指導に富つたのは、桂園派歌人村山松根翁であつたが、また父君の力が大きく影響したことは想像に難くない。作歌の種子はかうして純情無垢な心の畑に下された。

少女時代の作品で、最も幼い頃の歌として、残つてゐるのは

每春翫梅

おばあさんはるごとに咲く梅の花もてあそびつつ年とりにけり

の一首で、祖母君蓮界院の古稀の賀に、短冊に書いて贈られたものである。時代は明治二十九年、作者十歳の春である。

無邪氣で純な歌であるが、流石に題意は正確に把握してゐる。

へ御歌所の故高崎男爵や、寄人、參候の人達が京に來られる場合は、必ず山莊に歌の會が催はされた。そして紅懷紙を前に、自分も一人前の心持ちで歌をかきつけて、お仲間入したお得意の心持ちも今おもふと實に無邪氣なものであつた。〴〵と追懷し、

獨活のかましめすがほどをふりそそぐ雨あたたかき桃山の莊（薰染）

秋たけて茶のはな咲きぬ山城の木幡のさとにありし日の若さ（〳〵）

山城の木幡のさとをゆきゆけば柿の實うれて茶の花さけり（クク）

とも歌ひ幸福な少女時代を懷しむ心はやがて、在りし日の父君へ注ぐ追慕の涙ともなつた。

ありし春花のうたげにともなはれ語りし父のおもかげに見ゆ（薰染）

思出もつぎず散りくる花もつぎず春の夕べのもののかなしさ（クク）

その後、少女時代の夫人の歌境は漸次進み、京の歌壇の隆盛と共に、大谷家に關係深い婦人を會員として、
「詞の友」（後に清風會）といふ歌の集ひが組織されるに至つた。夫人が會員の一人であつたことは勿論である。
當時の作品は題詠によるものではあつたが、

栽梅

けふやさくあすや咲かんと室にいれてあまひのみまつ手づくりのうめ

卯花盛

あめはれてみどりにこもる庭の面ひとりうづきの花ましろなり

新秋

はなかずのすくなくなりし夕がほのかきねに虫はなきそめにけり

これ等三首の歌の中には、一般題詠の弊といふものの、あまり強くは感じられない作品もあるが、所詮は傳統
短歌で、固より當然の事である。

一方當時國家の情勢も轉換期に際會し、夫人の生活も著しい變貌を呈した。へ兄法主には、大きく世界的情勢

を見ることを啓發され、うちにはロシアとの戦争に報國團體が結成され、佛教婦人會の連絡をとり、籌子夫人について各地遊説に外の風にも吹かれることが多くなつて、育ちゆく心はいつまでおはいお姫さまでをるであらうか。人を見る目も出來れば人の價值もわかつてくる。

阿諛と權謀の周圍で、離れてはじめて貴さのわかるのは真だけだ⁽⁵⁾といふのは漸々少女期を脱した、夫人の間形成の成長過程を物語つてゐるもので、夫人の前期の生活は一應終ることとなる。

2

へ題詠に非されば歌を作らず、歌を作るには必ず題を課すといふ事となれば、歌に作らるべき材料題目は普通尋常の梅、櫻、月、雲などいへる者に限られ、新らしき事物を採用せられず、新らしき風韻は發揮せられず、剩さへ題意及び古歌の例に拘泥し、勝負を争ひ虚名を求むるを目的とするために、語句の上のみに巧を弄して事物の趣向配合の妙などは毫も之を顧みず、終には、何の題には斯く詠め、何々の語は斯く用ゐよ、何は何と、全く之を狹隘なる區域に追ひ入れ、しかも之を秘傳といひ口傳と稱へて珍重するに至る。是に於て歌はいよいよ退歩するの一方となれり。是れ題に拘泥したるの弊なり、其弊今日に傳はりて猶改められんともせざるは、數百年來の慣習の致すとは云へ、歌よみ連の無見識に驚かざるを得ず。

歌を作るは善き歌を作れば即ち足れり。其方法は必ずしも問ふを須らず、題詠にても善き歌を作るを得ば題詠亦惡きに非ず。されど所謂歌よみの如く題に拘泥しては到底善き歌を得べしと思はれず。題は成るべく其意義

を廣くし、單に歌の符號として取扱はん事を望むなり。』といふ子規の主張は、傳統短歌の萎縮して振はない根源が題詠にあることを痛烈に批判したもので、萬葉復歸を提唱しやがて寫生說により短歌革新の實踐運動に入つたことは、茲に詳細に説くまでもないことである。

かうして夫人が少女期に作歌の道に進んでゐる時、歌壇の革新的新風は徐々に、傳統と因襲を破壊して、近代短歌樹立の胎動を續けてゐたのである。

近代短歌生誕の源流をなす者が、與謝野鐵幹であり、また正岡子規であることは、改めて云ふまでもないが、明治三十三年新詩社の組織と共に、同年四月その機關誌「明星」を發刊し、自由奔放な表現に戀と夢幻の浪漫的心情を謳歌し、當時の歌壇を風靡したが、へ去年の夏頃ある雜誌に短歌の事を論じて鐵幹子規と並記し兩者同一趣味なるかの如くいへり。吾れ以爲へらく兩者の短歌全く標準を異にす、鐵幹是ならば子規非なり。子規是ならば鐵幹非なり、鐵幹と子規とは並稱すべき者にあらず。』と眞向から反對の立場をとつたのが正岡子規である。子規の反對に拘らず、「明星」の活潑な動きは時代の潮流に乗つて、後期浪漫主義の花を見事に咲かせた。かうして時の流れはへ日露戰爭を經過することによつて、日本の資本主義はさらに發展した。そしてそのことによつてようやく巨大獨占主義が形成され、帝國主義的様相が明確になつた。ここから當然資本主義自體の内包する社會的矛盾が表面化して來た。』

時代の風潮は現實主義に傾き、美の追求は眞の探求となるに及び、「明星」の浪漫主義は萎縮し、やがて色褪せた花となり、文壇の自然主義文學運動の波浪が歌壇の岸を洗ふに至つた。この機運に登場したのが、青年歌人

若山牧水、前田夕暮等の人々である。

へ第七期は、大正三年ごろから現在に至る約十五六年間と、なほ未來に連續を豫想せしめる長期間であつて、この期間に於ける主潮流をなすものは「アララギ」の歌風である。……「アララギ」の現實主義、寫生流、實相流の歌風は華かではないが、何か人間の實相に觸れるものがあり、加ふるに日本人が發明した手堅い萬葉調を以てしたのであるから、そこに心の親和をおぼえて、晶子流の新派の句に飽いてゐたものもとありあへずこの歌風に赴いたのではあるまいか。子規の主張が漸く實を結んで廣く一般の支持を受けるに至つた譯である。武子夫人はかういふ時代背景のもとに再び歌の道に入つたのである。——茲に中期の短歌生活が始ることになる。

3

へ殊に歌の道は、苦難の心に最も力があつた。夫人の苦しみが深まれば深まるほど、歌心は湧き溢れ、深い詩情となつていつた。かうして幼い頃から親しんだ歌の道に、憂の心を和げることが多かつた。そのかみ、今は亡き父君に教へられたこの道が、今しも心を慰むる大きなよすがとなつたとは、いたましい宿命である。しかし強い惱から生れ出る、否、心の惱や苦しさを其のままに歌に對する夫人には、新たな歌の世界が開かれ、新しい詩情に目ざめるやうになり、過去の歌作がふさはしくないことを感じられたのであつた。かうして「心の花」の主宰者佐佐木信綱博士の門を敲いたのは、大正五年九月で夫人の卅歳の頃である。へ過去の歌作がふさはしくないと感じられたのは、上述の歌壇の事情を敏感に察知し、新しい時代の動きを體得した爲に外ならな

いが、同時にへ美的形象は感覺に對して、直接に與へられるものではなく、思想が先づそれをうちから照らさなければならぬ⁽¹¹⁾。といふ作歌態度の自覺も亦自ら夫人の心に生じたことであらう。また茲にへ苦難の心⁽¹²⁾と云ふのは、肉身の父君光尊師を寂光の都へ送つた悲しみ、更に眞の姉妹以上の親愛を以て、幼い頃から共に生活し長じて本山の婦人會其他の仕事に協力して來た義姉君壽子の方との永訣もあらうし、又更には事情によつて十年空聞を守らなければならなかつた事にもあるであらうと察することが出来る。この苦惱を如何に止揚し征服して純一を求めたかといふことは夫人の短歌が自らにして語るだらう。

夫人が「心の花」に作品を發表した初期の頃は「秋の夜」の筆名で、これは夫人の望みによつて、竹柏園主の命名したものである。へ今すこし上手になり候までは、私歌よむこと、どなたにも御秘め置き下されたく願ひ上げ候。先夜ゆくりなく先生に御目にかゝり候時、「秋の夜」とあはれにやさしき名をいたゞき候まゝ、「秋の夜」としるしつけ候⁽¹³⁾と謙虚な氣持とその喜びを語つてゐる。夫人が同人となつて作品を發表したへ「心の花」の創刊は「馬酸木」、「明星」に數年先立ち、明治の革新期以來、最も古い。五十餘年を経た竹柏會及び「心の花」の歴史を大觀する時、園主の「廣く、深く、おのがじしにといふ、其門に集る人々が、自由に各自の個性を伸し、精進すべきであると云ふ指導精神は多彩にし種々の傾向の歌人を生んだ⁽¹⁴⁾」。

試みに、大正末期から昭和初年頃の「心の花」の同人を見ると、へ佐佐木信綱・石搏千亦・川田順・木下利玄・安田鞆彦・相馬御風・大塚楠緒子・片山廣子・橘糸重・九條武子・松本はつ子・樺山常子・藤田富子・藤瀬秀子・渡邊とめ子・柳原白蓮等（抄録）⁽¹⁵⁾等の人々で、女流歌人の活潑な動きが目立つた時代である。後年武子夫人は

東京移轉後、樺山・藤田・藤瀬・渡邊等の諸夫人と藤浪會を結成して作歌と文學研究に精進した。

その後夫人の作歌に對する熱意と精進は、入門後四年早くも處女歌集『金鈴』の出版となり、歌壇の注目を浴びたことは驚くべき飛躍的な進歩であり、また轉身と云はなければならぬ。併も少女時代に於ける形象把握の態度の甚だ消極的であつた作歌態度からは全く脱皮して、新しい歌の世界を展開した。

夫人にとつて已に作歌は夢の中の甘い感傷や、文學的遊戲ではなく、自己の生命を刻む一步々々の足跡でもあつたのである。

へ人生の眞剣な深刻な矛盾から回避せずしてこれを征服し止揚して純一になり得た人格的光輝である。⁽¹⁵⁾ この積極的態度は決して安易な道ではない、併も敢て夫人は進んで行つた。かうした作歌態度が『金鈴』を育てた所以であらう。

4

ゆふがすみ西の山の端つつむ頃ひとりの吾は悲しかりけり（金鈴）

緋の房の襖はかたく閉されて今日もさびしく物おもへとや（クク）

かりそめの別と聞きておとなしうなづきし子は若かりしかな（クク）

これはこれわが本心か十年の虐げられし恋のむくい（クク）

十年をわびて人まつひとりゐにざれ言いはんすべも忘れし（クク）

これらの歌には深い内省と自己を凝視した精神が見られる。へかりそめの別へそれを純真な若い心に、疑ひもなく肯定したことから人間的苦惱は夫人の心に芽生えて來た。へこの歌は、嫁がれてのち、夫君を待つて讀んだ歌だと解釋されてゐるけれど、もうそのころ、武子さんは二十三歳、令嬢としては出來上りすぎてゐる立派な人だつた。十八に、十七に、十九におきかへて考へると、おとなしうなづきし子が目に見えてくる⁽¹⁶⁾と解釋し、歌の對象を別人とする説もあるが、さして根據ある説だとも思はれない。特にこの歌の結句へ若かりしかなは單に年齢的に重點を置いて考へる必要もないと思ふから、私はやはり一般の解釋に従つておきたいと思ふ。

へこの後は、「かりそめの別と聞きておとなしくうなづいた若い過ぎ去つた日には、夢にも思はなかつた十年にわたる孤獨操守を絶えず歌によつて慰められた⁽¹⁷⁾」。

いくとせをわれにはうとき人ながら秋風ふけば戀しかりける（金鈴）

あはれにもつかれはてたるしれ人は夜さへひるさへただ君をのみ（クク）

夜くればものの理^{ことわり}みな忘れひたふる君を戀ふと告げまし（クク）

家ですて吾をもすてむ御心か吾のみ捨てむ御たくみかや（クク）

うらみごときこえむ時をまつ身にはこの玉の緒もたふとかりけり（クク）

雨がふる涙のやうな雨がふる寂しやこよひとくいねてまし（クク）

さながらにさばきの鐘をきく如し三百餘日罪にくらせば（クク）

へ「戀しさ」が對象の缺如を基礎として成立した事實は、情緒の系圖にあつて大きい意義を有つてゐる。それは

「戀しい」といふ感情の裏面には常に「寂しい」といふ感情が控へてゐることである。⁽¹⁸⁾ 愛する對象を心に抱き乍ら全き相に成り得ない情緒の様相が、「憎」の型を生み、更に絶望的な氣持が「うらみ」となつてゐる。孤立的な存在を自覺するときに「寂しさ」が心の底に流れる。この孤獨感に對しへ生るるも死するも所詮ひとりぞとしかおもひ入れば煩惱もあらず（金鈴）といふ自覺は、これ等一連の歌の様に愛慾の葛闘から、脱却しようとする苦しみ悩み抜いた果の夫人の心境を語るものであらう。へ神の火か魔の火か知らずわれゆかむその火の光いざなふ方に（金鈴）と或時は迷ひの岐路に立ち、へひやかに人と人を見おるせばわがゆく道もおのづから見ゆ（金鈴）と深い内省を我身に加へてもゐる。

聖者には夢も迷ひもあらずとやいともつめたきおん心かな（金鈴）

わが胸にかへらぬ人かあまりにもはかなし聲もまぼろしもなき（クク）

君しらずわれまた知らずあめつちにいとへだたりて生れこし身ぞ（クク）

おもひみればおのれてふものいましむと人のつくりし掟なりけり（クク）

掟ゆゑならはしゆゑといくたびかあきらめ難きあきらめもする（クク）

さとされて牢獄^{ひとや}の中に入りし子は十年にしてうたがひを知る（クク）

へ人として生くべくあまり冷えはてし君よ火山のふところにいれ（金鈴）と夫の態度の冷やかなのに、純情一路傾け盡した愛情にさへ今は疑の眼を向けなければならなくなつた。青春の心の嵐が漸く靜まつて、へあきらめ難きあきらめもするゝやうになる。とは云へ夫人の心の動搖は時にへ百人のわれにそしりの火はふるもひとり

のひとの涙にぞ足る（白孔雀）と退いて自己を憐みまたへ愛慾の焚木となりて燃えてゆくわが命なれわが願ひなれ（白孔雀）と進んで捨身宿業に殉じようと悲戀の哀しさに悶ゆる折がないでもなかつた。

へ愛憎の對象が非常に大きい存在性格を有つてゐる場合に「畏れ」と「諦め」とが融合して歸依忍従の混合感情を生ずることは宗教的情操に於て見られることである（¹⁹）歌に云ふ「掟」は人間の作つた傳統と因襲を指すものと思はれるが、夫人は聖愛に抱かれるまでの試練の戒と觀てゐる。一般の人々にとつてそれが長い間「家」を中心として人間性の解放に大きい障壁となつて現れてゐたことは否定出来ない。

へ愛は尊い。然し人と人との間に愛は、みづから之を専有しようとするときに、もろ／＼の悲しみが生ずる。自ら愛しまた愛せられることが、たとへ詐りのない素純な愛にせよ、自ら苦しみ、また他をも傷つけるところに地上の愛のつまづきがある。久遠の聖愛にふれることなく、單に慾望の満足をはかるために愛を翫んではならぬ（²⁰）夫人が地上の愛を否定しへ人の命いとも尊し偽の戀になさけにいかでけがさむ（金鈴）と人間の愛の苦しみつまづきを超克して、聖愛の久遠の光に魂の救ひを求めるまでの過程は正に青春を賭しての苦しい闘ひであつた。

5

ひとたびの誓こそげに尊けれ生死の道はいとかろきもの（金鈴）
人間の生死の道をおどろかぬわれとなりしもこの願より（クク）

何の因何の果なるやわが生をまとひはなれず呪咀と妬と（〳〵）

罪業の闇とこしに深くして聖者もわれをすてたまふかや（〳〵）

なにごとくも人間の子のまよひかや月はつめたき久遠の光（〳〵）

老もなく死もなき國に常樂のゑみとほこりを守れわが歌（〳〵）

へ煩惱は足の凡夫、火宅無常の世界はよろづのこと、みなもて、そらごと、たはごと、まことあることなきにたゞ念佛のみぞまことにてをはします⁽²¹⁾。〵と親鸞聖人は仰せられた。夫人はへいだかれてあるとし知らず愚かにもわれ反抗す大いなる手に（薰染）〵と人間の宿業を嘆き、呪咀と妬、罪業の闇に生きなければならぬ己を悲しみ久遠の光、唯一のまこと念佛の中に、救ひの光を仰いでゐるものと考へられる。

へ道をもとむる人のなかに、ともすれば人生を罪深いものとして、これを否定しようとするものがある。救済のひかりは悩めるもののためにかがやいてゐる。ひかりは呪はれた罪をこそ照らしてくれる。悩みのあるところひかりはつねに悩めるものと偕に在るのである。光に照らし出されたよろこびを味はふものは、また罪のなげきを味はふものであらう。否定し得ない罪をみつむるものこそ眞實に救ひのよろこびを受け入れることが出来る⁽²²⁾。といふ夫人自らの言葉は、茲に掲げた一連の歌の説明にもなるであらう。長い人間的苦惱の體驗を媒介としてへ救ひのよろこび〵に浸る様になつてからの夫人の生活に大きな轉機を將來したのは當然であるが、それが徐々に夫人の短歌の世界にも及んでゐることは、誰れしも氣附くことであらう。

へ君に聞きし勝鬘經のものがたりことばことばに光ありしか（薰染）へぬば玉の心のやみに點せんと永劫^{よこ}のと

もし火君とりましし（薰染）＼この歌は、島地大等をいたむ挽歌六首中のもので、へ永劫のともし火＼は夫人の心に點ぜられ、そこから詠み出づる短歌がやがて宗教的色彩を帯びる様になり獨自の歌の世界を開拓するに至つたことは、短歌の史的展開の上からも大きな足跡を残したものと云ひ得るかと思ふ。

へきえずてあれなき世の後も我といふ者の残せる一すぢの跡（薰染）＼へ死ぬまでを死にての後もわれといふもののこせる一すぢの道（白孔雀）＼一すぢの跡、一すぢの道は恐らく消えざる日はないであらう。併も夫人はへ同じ道をわれも追はれてゆくらむかしても亂れし足あとの多き（薰染）＼と嘆き、更にへぬばたまのあやめもわかぬ塗料もてぬりつぶさばや來し方のわれ（薰染）＼とも歌ひ、嚴しい内省の眼を自分に加へてゐる。かうした現世に生くる不安、焦躁、迷ひの中にへひるも夜もうつろのなかに、永遠不變の存在をもとめようとしてゐる。

あはれ現世にあれば、頼るべきたづきもしらず、すべてのすがたの、あまりに果敢なく消えてしまふ。まぼろしを遂うて生きる因縁所生の地上には、誇るべき何物もない。かなしくも貧しき心を、いつはりの衣に秘めつつ苦惱の開路はるかに、疲れ切つた歩みをつゞけなければならぬ自分を、しみ／＼といとしく思ふ。

しかしありのままなる懺悔をささげて、合掌の心にかへるとき、迷へるものゝために翳されてあつた導きの炬が瞭にみつめられるのである。⁽²⁴⁾＼かうした宿業に戦く懺悔の心を歌つたものに次のやうな歌がある。

拭へども油のやうににじみ出ぬ今さらなにとすべなきものを（薰染）

身のきぬを心のきぬを幾重かけからうじて我人にまじらふ（クク）

美しき裸形の身にも心にも幾重かさねしいつはりの衣（白孔雀）

夕されば今日もかなしき悔の色昨日よりもさらに濃さのまされる（クク）

ひたぶるによしとおもひいでし道いでも悔のなくばこそあらめ（無憂華）

まぼろしの柱ありけり女あまた命をかけてやすらひよれり（クク）

朝きししろたへ衣夕さればかなしき悔の色そめてけり（クク）

6

かうして夫人が念佛三昧の生活に求道の嚴肅を道を歩いてゐる中に、大正九年の暮、熱田丸は神戸の港に夫君良致男を運び、平和な家庭生活が、築地の本願寺で營まれるやうになつた。へ何事も思ふひまなく日は暮れぬそれも將よしこの頃のわれ（竹柏會主催歡迎會にて）は當時の平和な生活を詠んだものである。

茲に夫人の後期の生活は始まることになるが、併も平安の生活は長くは續かなかつた。それは大正十二年九月一日の關東大震災である。一朝にして、大都市を灰燼に歸し、十萬の生靈を滅した大悲慘事は強く夫人の心をうたずにはおかなかつた。

炎の歡呼（無憂華）

大地震に遭ひて（抄録）

大地さけ火炎うづまき湧きのぼる初秋九月の朔日の夜

母の如たのむ大地の叛逆になす術もなし人の子はあはれ

くづれおつるものゝおと人の叫ぶ聲かなし大地はゆれくづてやまず

十重二十重火炎の波におはれくづいづちゆくべきわが身ともしらず

ふとわれを流刑の囚とをのゝきぬうしろにあがる炎の歡呼

わがちからみなぎりおぼゆ創造の民のひとりとわれをよろこぶ

へかの一日の、一大天災と同時に、甦生した私は、うまれたまゝの裸同様になつてしまひました⁽²⁵⁾と云ひへ私はほんとに裸のお人形になつてしまひました⁽²⁵⁾へ今までは、かうまで切實には考へてをりませんでした。今は衣食に直面してをります。全く今度の天災が私どもに與へた、するどい試練の鞭で御座います。どうか歩たねばなりませぬ。そして、自分は自分の力で、この三つを得なければならぬので御座ります⁽²⁶⁾とも云つてゐる。夫人の轉機甦生の姿は灰燼の中から立上つて、聖愛のもとに救済と社會事業に挺身するやうになつた。

震災一周年の日二首

よろづ皆そらごとなりとのたまひし教まさしう身にしみし夜や（薰染）

人もわれも阿鼻叫喚の地獄界ただに譬喩^{たとへ}とおもひてありき（クク）

震災一周年の時に（二首）

因果經そのの繪卷をまなかひにひろげられしは夢ならざりき（白孔雀）

夢と思はば覺めてぞやすきまさごとは胸に消がたきおもひでを彫る（クク）

へ阿鼻叫喚の地獄界へ因果經の繪卷を此現世に身を以て體驗した夫人が、先に5の項に引用したへ……火

宅無常の世界はよろづのこと、みなもて、そらごと……と云ふ聖人の教を心深く味ひ無常の世界に、へたゞ念佛のみぞまことであることと云ふことをへまさしう身にしみて信受すると共に久遠の光の中にある身の法悦を一層深く魂の奥底に刻まれたことであらう。

第一の歩みをそこに踏みしめて道ひらきゆく人に幸あれ（薰染）

よはき足よわき心をきずつけて更にけはしき道えらみゆく（クク）

なやみても物の始をつくらましわがゆく道はわれつくらまし（クク）

誠こめてはなちし矢なり念願の的にあたるもあたらざらむも（クク）

世をこえてその世がつくるのりを超えてゆきにし人はゆきにけらずや（クク）

悲しさはあやしき目もて背の子がいぶかしきもの來れりと泣く（三河島にて）（クク）

永劫にいきなむねがひ門出でてこのうつし世に第一歩おく（クク）

これ等の歌には信仰に生くる夫人の堅い不動の信念が觀られる。個人の愛が萬人の聖愛に移つた時へわづらはし朝の人はあざみゆきぬ夕の人はたたへて過ぎぬ（金鈴）へ書く人もいふ人もはた咎はあらずものがたりめくわが宿世ゆゑ（金鈴）へ騒しき世にもあるかないささかのことをなししにとどまるものを（白孔雀）世の中の毀譽褒貶は問題でない。へあなかしこ半夜ひそかに坐してむかふ遠つみ祖の聖の御影（薰染）へうつくしい信の世界には、懷疑もなければ恐怖もない。あらゆる虚飾から放たれた合掌のすがたは、また感謝のすがたそのものである。感謝される心持は、信ずるものゝみが知る法悦の世界である。この報恩感謝の生活の表れが、宗教

的實踐運動としての社會事業となり、着々と實行に移された。

結

うつし世のをみな子をのみ何いはむみ空の月も陽によりて照る（薰染）（1）

日輪にくらべむとしても足らずおもひあがりし心と云ふや（白孔雀）（2）

これ等二首の歌を夫人の歌集に見出した時、夫人の數多い歌の中でこれは變つた傾向の歌だと深い興味を覺えた。即ち（1）の歌は、女性の一種の抵抗感を歌ひ、（2）の歌は青鞥の創刊號（明治四十四年九月）に載つた平塚らいてうの、發刊の辭を連想させる歌だからである。

原始、女性は太陽であつた

今、女性は何である。他に依つて生き、他の光によつて輝く、病人のような蒼白い顔の月である。

××× （中略）

私共は隠されたる我が太陽を今取戻さねばならぬ。

隠れたる我が太陽を、潜める天才を顯現せよ^{（26）}

××× （後略）

らいてうの、この宣言は女性解放の第一聲でヘイブセンの「人形の家」そのほか女性の解放を主題とした作品がさかんに讀まれ、もはや「戀」のみに生きるのではなく、情と智と二つながら生かそうとするときであつた。

この中から青鞥社は生れた⁽²⁹⁾のである。

坪内博士の文藝協會が「人形の家」を上演したのもこの頃である。「新らしい女」といふ言葉が、時代の流行語にまでなつた程、社會の婦人問題に對する關心が深まり、思想の面からも婦人問題研究の黎明期たるの觀を呈した。青春時代をこの時期に育つた夫人が、新しい時代思潮に無關心であらう筈はない。前記の歌は、消極的ではあるがへ牢のうちに心倦みたる人いとし智をも力をもせんすべをなみ（白孔雀）といふ退嬰的な心境よりは、少くとも一步前進してゐるだらう。ともあれ夫人も亦時代の苦惱を背負つて自己の道を眞剣に伐り拓いた婦人の一人である。へたたかへとあたへられたる運命かあきらめよてふ業因かこれ（白孔雀）へはたすべきこれわがもてる使命ぞと夢寢に忘ることならなくに（白孔雀）へしかはあれど思ひあまりて往きゆかばおのがゆくべき道あらむかな（白孔雀）そして流轉の惱みの果、最後に到達した道は、やはり一般に夫人の代表歌と目せられてゐる

おほいなるものちからにひかれゆくわがあしあとのおぼつかなしや

の一首に盛られてゐる久遠の光にみちびかれる宗教的信仰の白道であらう。この歌は、無憂華々卷頭の色紙の歌で、夫人の歿後間もなく、築地本願寺の境内に歌碑として建てられてゐる。猶々薰染々中の一首

叡山にて

山の院櫺子の端にせきれいの巢ありひな三つ母まちて鳴く

の歌を刻んだ歌碑が、釋迦堂の傍にある。この歌は大谷紅子裏方の筆で、昭和廿九年六月、佛教婦人會總連盟

によつて建てられたものである。

(附)——武子夫人の「金鈴」(二〇〇首)「無憂華」(二〇七首)「薰染」(三八二首)「白孔雀」(三四四首)の總歌數一一三〇餘首中から宗教的短歌と考へられる作品を抄出して見ると、約一六〇首餘ある。

勿論選出の規準に依つて多少の出入は當然あり得るが、夫人の作歌傾向の特質を知る上の一般目標にはなり得るかと思ふ。

註(1) 佐佐木信綱「金鈴」解説

(2) 九條武子「無憂華」一五九頁—一七二頁

(3) 山中峯太郎「九條武子夫人」四四頁

(4) 九條武子「無憂華」一六九頁

(5) 長谷川時雨「九條武子」(特集文藝昭和卅一年十月號三〇九頁)

(6) 正岡子規「歌の題」(現代日本文學全集(11)三三一頁)

(7) 正岡子規「墨汁一滴」(同右、四〇頁)

(8) 渡邊順三「近代短歌史」第一部一一四頁

(9) 齋藤茂吉「明治大正短歌史」第七章一六〇頁

(10) 佐佐木信綱「麗人九條武子」八八頁

(11) 土居光知「文學序説」四七七頁

(12) 佐佐木信綱編「九條武子夫人書簡集」三〇七頁

(13) 佐佐木治綱「竹柏會と心の花」(國文學解釋と鑑賞百九十一號八一頁)

九條武子夫人

九條武子夫人

- (14) 柳田新太郎「現代短歌系統圖」B昭和十年末調査
 - (15) 土居光知「文學序説」三一頁
 - (16) 長谷川時雨「九條武子」(特集文藝昭和卅一年十月號三〇九頁)
 - (17) 佐佐木信綱「麗人九條武子」九四頁
 - (18) 九鬼周造「文藝論」一九七頁
 - (19) 同 右 同右 二〇六頁
 - (20) 九條武子「無憂華」九頁
 - (21) 近角常觀「歎異鈔講義」二四〇頁
 - (22) 九條武子「無憂華」五八頁
 - (23) 同 右 同右 一一五頁
 - (24) 佐佐木信綱編「九條武子夫人書簡集」二一九頁
 - (25) 同 右 同右 二二五頁
 - (26) ク ク ク 二二二頁
 - (27) 九條武子「無憂華」三三頁
 - (28) 平塚らいてふ「私の歩いた道」九四頁
 - (29) 井上清「日本女性史」二一〇頁
- 參考資料、岡邦俊「現代人の眞宗讀本」増谷文雄「佛教とは何か」